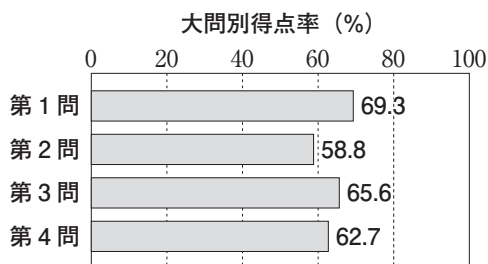
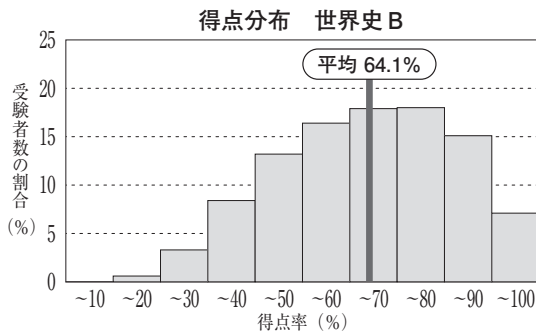


世界史B

第二次世界大戦以降の現代史の基礎を着実に身につけよう。

I. 全体講評

今回の平均点は、64.1点であった。基本事項に関する出題が多いセンター試験本試験に比べて、難易度が多少高いことからすると、満足すべき結果であったと考える。ただ第二次世界大戦以降の現代史まで学習が届いていないのか、正答率ワースト3は、解答番号[36]の34.4%、解答番号[34]の36.1%、解答番号[22]の39.3%であった。これらは、現代史の基本的事項に属することと考える。現代史の基本さえおさえれば、センター試験本試験であと10点以上の伸びが期待できよう。また問題形式では、年表補充の問題、具体的には解答番号[9]と解答番号[18]の正答率が、54.5%、50.0%と低かった。基本的事項なので正確な年号を覚えておく必要がある。また、解答番号[36]のようなグラフの問題などふだん見ないような問題にも動揺せず、しっかり分析することにも慣れておこう。



II. 大問別分析

第1問 世界史上の異文化接触

基本的な年号はきちんと記憶しておこう。

第1問の得点率は、69.3%と全大問中最高であった。得点率が伸びたのは、ナーナクが創始した宗教を答えさせる問7の正答率が86.4%、ゲルマン人の移動を問う問4の正答率が80.1%と高かったからである。この2つはインド史とヨーロッパ史の基本がきちんとおさえられていた結果であろう。これに対してフランス革命についての正文選択の問題である問3は、正答率が52.8%と高くなく、そのうえ「人権宣言は、アメリカ独立宣言に影響を与えた」を正文にした受験生が32.1%もいたことに驚かされた。アメリカ独立宣言は1776年、人権宣言は1789年という基本的な年号を覚えていなかった結果であろう。全般に言えることであるが、基本的な年号はきちんと記憶しておく必要がある。正答率が54.5%と高いとは言えないインド国民会議のカルカッタ大会の時期を問う問9は、たとえ正確に年号を覚えていなくても、同大会がベンガル分割令に対抗したものとわかっていればできたはずである。アグラの位置を問う問8は、正答率62.6%と予想外に低かった。マジャール人のハンガリー建国を問う問1の正答率が72.5%、ハールーン=アッラシドという誤文を選ばせる問5の正答率が69.0%で、この2つは基本中の基本と考えると満足すべき結果ではない。これに対して訓民正音の制定を問う問2の正答率76.3%と、近現代のキューバとフィリピンを問う問6の正答率69.4%は健闘した結果と考える。

第2問 世界史上の学校・教育

文化史の基本をおさえよう。

第2問は、得点率58.8%と全大問中最も低かった。45.5%と特に正答率が低かった問4は、ゴール朝がガズナ朝を滅ぼしたのが12世紀と覚えていなかった受験者が多かった結果であろう。正答率48.5%の問5は、ホメイニとモサデグを間違えた結果

のようである。また、正答率47.0%の問8も、ウィクリフとオッカムを間違えた結果であろう。これに対して全問中正答率が90.7%と最も高かったのは、問2のタラス河畔の戦いを問う正文選択の問題であった。製紙法の西伝は世界史のロマンをかきたてるものなのかもしれない。大問中74.6%と次に正答率が高かったのは、古代ギリシア史の年代整序問題である問1であった。一般的には正答率が低くなる年代整序問題であるが、古代ギリシア史についてはそうでもないようである。一方、リウィウスが『ローマ史』を著したことを問う問6は、正答率55.9%とあまり高くなかった。文化史の基本に不安を感じる。日本人を含むアジア人を閉め出したアメリカの移民法の時期を問う年表補充問題の問9が正答率50.0%というのは、日本史との関連で重要であることを考えると不満が残る。オックスフォード大学とアズハル学院について問う問3は文化史としてはまずまずの65.6%という結果であった。コシューシコ（コチシューシコ）とコシュートを判別させる問7の正答率63.0%も、学習が手薄になりがちな東ヨーロッパの歴史ということで現段階では仕方のないものかもしれない。

第3問 世界史上の危機

現代史を重点的に復習しよう。

第3問の得点率は65.6%と全大問中2番目に高かった。得点率を押し上げたのは、始皇帝の事績について問う問2の正答率82.7%と「未回収のイタリア」の位置を問う問9の正答率78.1%であった。基本的な事項ではあるが、満足すべき結果であった。これに対して正答率39.3%と低かったのはアメリカ現代史で、女性参政権、ワグナー法、公民権法の順序を問う年代整序問題である問4であった。これらの年号は覚えなければならない基本的なものではない。しかし、第一次世界大戦後の女性参政権獲得、世界恐慌中のニューディールのワグナー法、第二次大戦後の公民権法というアメリカ史の流れさえ頭に入れておけばできる問題であったろう。また正答率55.8%のスカルノの事績を問う問5は、現代史の基本的問題なので不満足な結果である。蒋介石を問う問1の正答率60.9%とロシア革命の基本を問う問3の正答率65.4%も、現代史の基本的事項と考えると不満足なものである。同様にルブルックを問う問8も、基本的事項なので正答率64.2%

は低い。これに対してセルジューク朝を問う問7の正答率73.3%は満足できる結果であった。ベルリン封鎖とチェルノブイリ原子力発電所事故について問う問6の正答率74.6%は健闘した結果であった。

第4問 世界史の中の日本

世界史に関わる日本史の事項は正確に確認しよう。

第4問の得点率は、62.7%と全大問中2番目に低いものであった。得点率を下げたのは、正答率34.4%と全問中最も低かった問9と全問中2番目に低かった正答率36.1%の問7があったからである。韓国の経済成長率を読み取る問9は、金大中による南北首脳会談がいつ行われたかを知らなければ解けない問題であった。一方、問7の結果は、モエンジョ＝ダーロ遺跡の位置が現在のパキスタンにあることを覚えていない受験者が多くいることを示している。正答率が高かったのは、バタヴィアを問う問2の81.7%、第一次世界大戦前後のドイツについて問う問4の81.0%とドル＝ショックについて問う問8の78.6%であった。すべて基本的事項とはいえ、現代史を含むことを考えると安心できる結果であった。しかし、17世紀の日本の「鎖国」を問う問1の正答率58.4%は非常に残念な結果である。外国との通行の制限が「鎖国」の本質なのであるから、「鎖国」という言葉が出てなくてもできなければならない問題であった。また、問3の正答率59.7%も、ヘンリ8世の事績とイェズス会の創設という基本的な問題なので不満が残る結果であった。第一次世界大戦後の日本について問う問5の正答率55.1%も、中学校で学習済みの事項と考えると低いと言わざるを得ない。しかし、ワシントン会議の内容を問う問6の正答率67.4%は健闘したと言えよう。

Ⅲ. 学習アドバイス

◆知識の精度を上げ、学力を完成させよう！

近現代史を中心に年表補充問題、年代整序6択問題などへの対応力を完成させ、地図や図版などを参照しつつ地理的・視覚的把握に留意しよう。試験本番での健闘を祈る。